

「デジタル・アーカイブ速報」No.43

岐阜女子大学 文化創造学部

〒501-2592 岐阜市太郎丸 80

フリーダイヤル 0120-661184

URL <http://www.gijodai.ac.jp/>

岐阜女子大学大学院 文化創造学研究科(事務局)

〒500-8813 岐阜市明德町 10 番地 杉山ビル 4F

TEL 058-212-3257 FAX 058-212-3258

URL <http://www.gijodai.jp/graduate/>

フランスの博物館等におけるアーカイブの現状報告

岐阜女子大学では、デジタル・アーキビストの教育プログラムの一環として日本国内の様々な博物館・図書館・文書館での研修を行っています。いままでに、国立科学博物館、国立国会図書館、国立公文書館など国立の博物館・図書館・文書館をはじめ、NHK アーカイブズ、印刷博物館、東京国立近代美術館、奈良国立博物館、沖縄県公文書館など多くの博物館・図書館・文書館で研修を行ってきました。そんな中、この度、博物館学の泰斗・常磐大学教授・水嶋英治先生の引率を得て、海外の博物館・図書館・文書館を対象とした研修をパリを中心に行いましたので、その報告をいたします。

総論としては、フランスの博物館等におけるアーカイブは専門性が高く、司書・学芸員・アーキビスト (bibliothécaire/ conservateur/archivist) も各々専門職としての知識を身につけ訓練をつんでいます。同じフランス絵画でも中世美術はクリュニー、中世以降印象派まではルーヴル、印象派以降はオルセーといった時代別の分類・専門化も行われています。資料のデジタル化に関しては、上記の専門家が主体となって技術者を使ってすすめています。そんな中お会いした生涯学習局の方より日本のデジタル・アーキビストについて強い関心が示されました。

また、伝統を重んじる社会の中にあって、歴史的遺産の保存・維持・管理・活用に加えて、活性化を図るための刺激的な試みがなされていることに感銘を受けました。

研修期間： 平成 22 年 9 月 9 日～9 月 16 日

研修場所： フランス パリ ほか

ラ・ヴィレット科学産業都市博物館 フランス国立中央文書館

オランジュリー美術館 ルーブル美術館

世界遺産モン・サン・ミシエル修道院 ノートルダム大聖堂

クリュニー美術館 ヴェルサイユ宮殿

ロワール地方シャンボール城・シュヴェルニー城 他

ラ・ヴィレット科学産業都市博物館 (Citè des Sciences et de l'industrie)

ラ・ヴィレット科学産業都市博物館は、古くは羊や牛の屠殺(とさつ)場であった 55 へ



クターの広大な場所に造られたラ・ヴィレット公園の一面に位置する博物館で、1986年ミッテラン大統領の時代にオープンしました。フランスではルーヴル、ポンピドー、ヴェルサイユ、オルセーに次ぐ5番目に人気の高い博物館として知られています。2008年度の来館者数は総数で3,042,000人、一日平均16,700人となります。

フランスにおいては各博物館の専門性を大変重んじており、ラ・ヴィレットでは科学系の資料の収集を行っています。研修日当日は Claire Jullion 氏(Bibliothèque、Scientifica 部門責任者)に図書の部分を中心にご案内いただき、科学技術に関する史資料の収集と保管および利活用について、実際に各フロアに入れていただきながら説明をしていただきました。古書のフロアでは、フォンドごとに分類された重要史資料が配架されており、著名な啓蒙思想家ディドロ&ダランベールの『百科全書』(Diderot and d'Alembert:L'Encyclopedie, ou Dictionnaire raisonne des sciences, des arts et des metiers, par une societe de gens de letters)の装丁前の初版などもみせていただきました。

職員数は120人(司書は60人)、書籍のデジタル化を担当するのは4人(常勤は1人)、開館時間は12時から19時、予算削減によるマンパワーの不足が課題だということです。

フランス国立中央文書館 (Archives Nationales)

近代的公文書館の嚆矢であるフランス国立中央文書館は、以下の5つに分割されており、それぞれの収蔵物(アーカイブ)は以下の通りです。

1. パリ (Paris) : 1958年以前の文書・記録
2. フォンテインブローウ(Fontainebleau) : 1958年以降の比較的新しい文書・記録
3. ANOM (Archives nationales d'outre-mer) : フランスの植民地やアルジェリアに関する文書・記録
4. ANMT (Archives nationales du monde du travail) : ビジネス、貿易、組合、団体、建築家に関する文書・記録
5. ピエールフィット＝シュル＝セヌ (Pierrefitte-sur-Seine) : 現在建設中の新しいアーカイブセンター2012年に開館予定

このうち、今回私たちが研修をしたのは1. パリの文書館です。パリの文書館はフランス革命期に構想され、1794年に正式に設置が決められました。1808年、ナポレオン3世は、国家の公文書を保存するため、マレー地区にあるロココ調の建造物スービーズ館(Hôtel de Soubise)を保管場所としました。現在では国立古文書館・歴史博物館になっています。収蔵



物は大きくフランス革命以前の部門と革命後の部門に分かれています。前者には中世以来の王室文書や国務会議記録、裁判所の文書がアーカイブ化されています。

ここでは、国立美術館博物館特別専門講師（Conferencier）である Mathilde Cauras 氏の案内で、本来一般公開されていない Hôtel de Soubise 内の 'Stocaged' Archives を見学させていただきました。

内部は撮影禁止のため、写真はありますが、研修では、特に重要な史資料が保管されている鉄製の金庫室前まで入らせていただき、内部の説明などもしていただくことができました。ナポレオン 3 世の見て楽しめる施設というコンセプトのもとに檜の木と鉄で作られた建物で、パリのオペラ座同様、内部に入った者を圧倒する印象の建物です。

もっとも古い資料として 625 年の手書きのパピルス、1429 年に処刑されたジャンヌ・ダルクに関する同時代の絵、圧政の象徴であるバスチユ監獄解体の証明書、1789 年当時の国王が所有する宝石の一覧表、1214 年から 1789 年までの出生記録、王覧オペラの舞台装置の記録など貴重な資料が収蔵されています。文書のほかにもフランスの歴史研究に意味のある写真や現物なども収蔵されています。また収蔵物の数は明らかにされませんでした。収蔵物を一列に並べると 97km になるそうです。

フランスの文書館制度は、国立中央文書館を頂点に、県文書館（Archives Departementales）、市町村文書館（Archives Communales）がおかれ、資料保存体系が全国的に整えられています。

ルーヴル美術館（Musée Du Louvre）

文化的建造物としてのルーヴルの歴史は 12 世紀末に始まりました。フランス国王フィリップ・オーギュスト（1165-1223）は、敵対するイギリスの攻撃からパリを守るために現在のルーヴルの位置に城壁で囲まれた要塞をつくりました。シャルル 5 世（1338-1380）はルーヴル宮を定住の場所と定め王室の権力を高めるためルーヴルを改築しましたが、国王の住居として長くは使われませんでした。百年戦争という長い混乱期を経て、フランソワ 1 世（1494-1547）の時代にルーヴルは王にふさわしい宮殿になりましたが、1678 年ルイ 14 世（1643-1715）は定住の場をヴェルサイユ宮殿に移しました。1857 年ナポレオン 3 世（1808-1873）即位後ルーヴルは今日の威風堂々とした宮殿に生まれ変わりました。そして 20 世紀後半、1981 年ミッテラン大統領の時代にナポレオン広場にガラスのピラミッドが設置され、ルーヴルは現代的な建造物となったのです。

ルーヴルが美術館として開館したのは 1793 年 8 月 10 日フランス革命のさなかです。そ

の後ナポレオンが戦利品として持ち帰った作品が加わり、現代にいたるまでコレクションの増大が続いています。現在コレクションは8部門に分かれ、3万点が公開されています。



ルーヴルの収入は年間270億円、このうち国からの補助が54%、115億円が入館料です。地下のショッピングモールでグッズなどを販売しています。年間の入場者数は822万人。就業者は1519人、このうち警備関係者が約1000人、学芸員150人、技術者134人、管理部門116人、その他となります。

今回の研修では Eric Pierre 氏の案内で、ミロのヴィーナス、モナリザなどの展示を見学しました。彫刻展示における破損(破壊)された断片の保管および展示に関わるスタンスなど、一般の観光用の説明とは異なる視点での説明も盛り込んでいただきながら、広大な展示スペースをみてまわりました。

今回の研修では Eric Pierre 氏の案内で、ミロのヴィーナス、モナリザなどの展示

ヴェルサイユ宮殿 (Château de Versailles)

ヴェルサイユ宮殿は、17世紀前半にルイ13世の狩猟の時の館として建造されました。その後1682年ルイ14世(1638-1715)は政治の中心をヴェルサイユに移し、以後1789年のフランス革命まで、ヴェルサイユは王の居城であり、政治の中心であり、フランス絶対王政とフランス古典主義芸術の象徴的建造物であり続けました。有名な鏡の間ではその絢爛豪華な作りが重要な外交の場となり、外国からの賓客を迎えました。革命後は歴史博物館として生まれ変わり、ユネスコの世界遺産にも指定され現在にいたっています。



さて、このフランス古典主義芸術の象徴的建造物において、日本が誇る芸術家・村上隆氏の展示 (Murakami Versailles) が2010年9月14日~12月12日の日程で開催されています。ヴェルサイユのミッションの一部はフランスの歴史的遺産の保存・維持・管理・活用にあります。同時に彼らは様々な芸術的事業を実施することでヴェルサイユの活性化を図っています。今回、村上隆氏を迎えることでヴェルサイユは東

と西の出会い、過去と現在の出会い、その源は大きく異なるがともに強烈なインパクトを持つ二つの芸術の出会いを創出することで、大いに刺激的な場を私たちに提供しています。

(文責 三宅茜巳・谷里佐)